

先生は学生中から帝劇や歌舞伎座で演劇や歌舞伎を愛好されたり、当時モダンだったゴルフをたしなまれたり、趣味の人であったこともふれられているが、大正九年御卒業と同時に副手、翌一〇年助手、同一五年講師になられている。大学院終了時の学位論文は、「先天性股関節脱臼における」アンテトルジオン（大腿頸部前捻）の研究」で医学博士になっておられ、先天性股関節脱臼が先生の生涯にわたる研究テーマであった発端を窺うことができる。

先生は大正一四年一〇月五日の日本整形外科学会創立一八名の発起人の中にも入っておられることは歴史的にも興味がある。日本の整形外科学の創基者の初代の方々を、東大の田代、京大の松岡、九大の住田らとすると、名倉重雄先生は第二の世代に当り、田代義徳門下から、神中正一、高木憲次、名倉重雄、木島一郎、片山国幸、金子魁一らの諸先生が輩出していることも歴史に残る事実である。

本書には、名倉家の歴史、森鷗外との交流、先生の学生時代、医局在勤時代から、日本整形外科学会の創立、愛知医科大学への赴任、骨端炎、離断性骨端骨炎、先天性股関節脱臼の自然治癒、骨変形成因の研究、軟骨化骨説の着想、胎児の母体内運動によつて起こる第二次的性格の先天奇形の成因説等多岐にわたるとともに、今日でもなおその先見の明に驚嘆を覚えるほどのものが本書に盛り込まれている。

先生が名古屋大学御在任中は太平洋戦争中でもあり、爆撃被災にも御苦労なされたほか、中華民国南京政府汪兆銘（汪精

衛）首席の主治医として名古屋帝国大学医学部において極秘裡にその治療・看護に当られたこと等も、また敗戦全焼に近い惨状の中から苦難の大学復興、昭和二年の第一二回日本医学会における整形外科学会の主催も盛られ、また退官後は、東京厚生年金病院の創設と病院長時代の御苦労と業績、多くの門下生の育成、国内外の友人との交流、ことに先生はドイツ整形外科学会の名誉会員でもあられたが、ドイツ語にきわめて御堪能で、つとめて原著をドイツ語で発表され、ドイツで最も有名な日本の整形外科医であったこと、等々余すところなく先生の人と業績が語られ、この世を去られるまでの足跡が、先生に対する尊敬と愛情をもって書かれており、先生が終始 Voll Orthogad（全き整形外科医）としての生涯を送られた姿とその信念が十二分に伝って来る誠によき伝記である。

一九九〇年十一月名古屋大学医学部整形外科同門会（名声会）編集発行・代表者村地俊二（A4判、二六六頁）、非売品である。

（津山 直一）

千葉県立中央博物館編集

『リンネと博物学—自然誌科学の源流』

昨秋、一九九四年十月一日から十二月四日まで千葉県立中央博物館において特別展、リンネ展が開催されて入場者は八

○三八名に及んだ。天皇、皇后の行幸が十一月二十四日にはあった。本展の開催に際し、館の平成六年度特別図録としてA4判、二二二ページの本書が出版されたので、その内容を簡単に紹介する。

館長沼田眞氏の序文について、今回展示されたリンネ資料の蒐集家レンスコーク氏のあいさつがある。スウェーデン人の氏はリンネの肖像画を蒐集したことがきっかけとなってリンネ関係のメダルや切手に及んだ。さらにその著書を可能なかぎり蒐集し、世界に稀なりんネ・コレクションをなしたげた熱血の人である。

日本ではあまり知られていないようであるが、スウェーデンではノーベル賞と同等ともいえるクラフフォード賞というのがある。これはスウェーデンの医療機器メーカー会社ガンのプロの経営者のクラフフォード家が設置したもので、数学、生物科学、天文学、地球科学の分野で、毎年すぐれた一件の業績にスウェーデン王立アカデミーの手から授与される。一九九四年にはパリ大学のC・Jアレール教授とカリフォルニア技術研究所のG・J・ヴァツサーバーク両氏のアイソトープ地質学の研究に百万クローネの賞金が与えられている。

このクラフフォード財団が先に述べたレンスコーク氏のリンネコレクションを所有していたが財政のため、つまりクラフフォード賞の資金のためにこのリンネコレクションの売却を決定したのである。今回、多くの人の努力が集まって千葉県議会はこのコレクションの購入を決定し、世界的なコレク

ションが無事、千葉県立中央博物館に収まったことは近頃の大快事といわねばならない。

自然科学、医学、農業を真に理解し、その発展を期するためには科学史、医学史が重要なことは論をまたない。西欧の第一級の科学者、医学者たちのうち一人でもよいから、身近にその存在を感じられる十分な資料がもし日本にあったら、どんなに素晴らしいことかと日頃から思っていた。西欧生物学者から三人を選ぶとすれば十八世紀のリンネ、十九世紀のダーウィン、二十世紀のメンデルの名が浮かぶ。そのうちで、蒐集がもつとも困難なりんネに関するコレクションが、ここ日本の千葉県立中央博物館に保存されることになったのは望外の幸運である。研究者の喜びのみならず、児童の科学教育の向上、市民が自然へと親しみを持ち、自然環境保存、動物の多様性へと目を向けることに大きな影響を与えるだろう。

このたびの博物館のリンネコレクションは場所の関係でその一部しか展示できなかった。しかし図録を見るだけでも多く学ぶことができる。その序文については美しい色彩画がつづく。まずリンネの力ではじめて実ったバナナの全形図、それについてバナナの花果の図、ついでリンネの体系を解説した英国のミラーの本から三図、カーチスの本から二図、日本ではじめてリンネ雌雄ずい分類体系を图示した伊藤圭介からの二十四綱図、諸家の動物図六枚、ウブサラのリンネ関係写真を集めた一葉。ついで図は白黒版となり、リンネ著「クリ

フォード庭園誌』の扉絵と植物図のすべて三十四図、『ラップランド植物誌』の十二図、リンネの弟子ペール・フォシユス・コールの植物図三図、動物図三図がある。以上の図につづいて、リンネ研究の記事をページ順にあげると次のようである。

「最高のナチュラリスト、リンネ(木村陽二郎)、分類学の黎明期における生物分類と種概念(直海俊一郎)、リンネと医学(梶田昭)、リンネと生態学(沼田眞)、リンネと昆虫学(小西正泰)、リネーとロシアの博物学者(小原敬)、植物分類学の始祖としてのリンネと種名のタイプ(大場秀章)、動物と植物の学名について(天野誠)、リネアン・ソサエティ、その歴史と現状(大場秀章)、ロンドンのリネアン・ソサエティ訪問記(林浩二)、リンネと鳥類学(桑原和之・茂田良光)、自然の体系、初版訳(遠藤恭彦・高橋直樹・駒井智幸)。

ついでリンネ関係の図書、書簡、メダル、年表の解説がつづき、リンネソウの説明や、基準標本の種類についてのコメントがある。文中にはリンネの多数の肖像画がちりばめられ蒐集家レンスコークの熱意がうかがわれる。

本図録のもっとも大きな特徴は第一六一から第二〇九ページに及ぶ大場達の『展示品解説』で「リンネ以前の博物学」「リンネの書簡」「リンネのしごと」にわかれ、リンネの著書のすべてのタイトルページを写真で示しているから正確に書名を知ることができ、いつまでたってもこの目録の価値は失われることはないと思う。「リンネと関係学者のメダル」も貴重な資料であり、巻末のリンネ関係年表も便利である。「短期

間の中に特別展企画実施リンネ委員会の諸氏、特に編集に活躍された大場達之、斎藤明子両氏の努力に敬意を表するものである。

なお同博物館友の会では『自然の体系』Systema Naturae 初版本の複製を三月の末までには刊行し、二〇〇〇円程度で販売するとの計画である。リンネの多くの著書のなかで最も有名でもっとも世界に少ないが、不朽の書『自然の体系』を実物とほとんど変わらず、しかも同形同寸で刊行されるこの複製は全図書館から喜んで迎えられるだろうし、研究者などの個人はもとより、大学から小学校の図書館にぜひ備えつけられるべきもので、安価で手に入れられるのは最近の出版界の一陣の清風といえよう。

(木村陽二郎)

(千葉県立中央博物館、千葉市中央区青葉町九五五一、電話〇四三一二六六一二四八一(友の会)では一九九四年八月発行、A4判、二二二頁の本書を頒価二〇〇〇円、送料実費で誰にでも送付する)